



瞑想空間の解

鶴海 秀一郎 (つるみ しゅういちろう)
千葉大学 工学部 建築学科



東京は今、深刻なストレス社会を抱えている。過労、職場での人間関係、都市空間の複雑化、移動のスピード化。多くの問題が、人の心に静かな影響を及ぼす。また、近年のパワースポットやヨガの流行は、スピリチュアルな面での癒しを求める傾向を裏付け、現代人は、瞑想体験（自己を見つめること）を必要としている。この瞑想体験を重要視し、都市の「癒しの場」としての役割を担う東京の公園に、自然と瞑想体験が流れ込む建築を設計する。「自己を見つめる」という虚の活動を、「公園」という、憩いの場に現し、「建築」という境界を、外部、内部に対して緩やかに連続・断絶させる操作で表現する。それにより、人は瞑想体験を身近に感じることができる。

講評

東京副都心西新宿高層ビル群の足元にひろがる公園に、建築空間を介在させ「自己を見つめる場」を構築するという壮大な提案である。スリット状の開口をもつ曲線壁群は、「隔てながら繋ぐ」という相反する機能を有し、豊かな植栽が広がる既存公園の景色＝「自然」と「私」との間に屹立、この曲線壁で抱かれた空間を「私」が歩く行為こそが「自己を見つめなおすこと」と定義する、詩的で造形的にも美しい作品である。都心の真ん中だからこそ、建築が介在してはじめて、四季や日時天候によって複雑に変化する自然が視覚化されると定義したことに、個人的には非常に共感させられた。都市機能である図書館等をさらに付加することで、多くの都心生活者が利用し新しい機能型公園が構築されるという、実現性のあるストーリーが高く評価された。(審査委員：関谷 和則)